

海外日本語学習者の動詞形の習得過程	
ナイダン・バヤルマー	比較社会文化学専攻
期間	2007年12月21日～2008年1月7日
場所	モンゴル ウランバートル
施設	モンゴル国立教育大学、モンゴル国立中央図書館

内容報告

1. 海外調査の必要性と目的

本報告は2007年度大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」の支援を得て行った学生海外調査研究の報告書である。

本調査の目的は、海外日本語学習者の発話データを収集することで、彼らの運用能力から動詞形の習得過程を把握することである。

修士論文で、日本で日本語を学習する年少学習者を対象に文法習得の一部を明らかにしたが、今後、対象者数を増やし、日本にいる他の年少学習者の場合、普遍性が見られるのか。そして、日本に住んでいるが、明示的な文法指導を受けていない成人自然習得者の場合はどうなのか。さらに、海外（モンゴル）で明示的な日本語指導を受けている教室学習者の場合、文法知識がどう形成されるのか、指導や学習環境による違いが見られるのかなどを追求する必要があり、その上でモンゴル語を母語とする日本語学習者の習得過程を明らかにしたいと思う。

モンゴル語は日本語と同じく膠着言語であり、動詞形は「語幹＋語尾」という語構成を示しながら活用する。しかし、日本語の動詞は活用の型として五段、一段、サ変・カ変動詞など3種類に分けられ、それによって語尾が変化していく。これに対しモンゴル語の動詞活用は語尾の変化を伴わない。そのため、モンゴル語を母語とする日本語学習者は、活用方法が複雑な日本語の動詞活用形をどのように処理し、どのように獲得しているのかを確認し、考察したい。

これまでの母語や第二言語習得研究では、人間に生まれつきに備わっている文法能力である「普遍文法」(Universal Grammar)があり、習得を可能にすると考えられる生成文法を支持する「生得的アプローチ」の立

場と1990年代頃から、発達心理学者 Langacker (2000) や Tomasello (2000, 2003) 等の認知言語学を支持する「認知的アプローチ」の立場がある。前者は、「規則活用は人間に生得的に備わっている普遍文法につかさどられて形成され、様々な文を作ることができる」というトップダウン式なプロセスだと考えているが、後者は「抽象的な構造を持った規則体系というよりも、以前経験した具体事例を基盤に、カテゴリー化がなされ、スキーマが定着して、その定着度に基づいて規則的な力が発揮される」というボトムアップ式なプロセスだと考えている。

生成文法を支持する Pinker (1998) は、「Words and Rules Model」を提唱し、言語には記憶された「語」と表象操作を行う「規則」があり、別々のシステムとして存在することを主張している。しかし、Vance (1991) は、日本語母語話者の動詞形の習得を、造語実験をおこなって分析した。その結果、日本語母語話者は動詞形を規則に基づいて活用するのではなく、活用された語形をそのまま記憶していることを明らかにした。Klafehn (2003) も Vance (1991) でおこなった方法の一部を訂正し、日本人母語話者と海外日本語学習者を対象に動詞形の習得過程を調査した。その結果、Vance (1991) と同様に、日本語母語話者の動詞形の習得過程には、「Words and Rules Model」で予測される「語」と「ルール」に基づく産出は見られず、活用された語形がそのまま記憶されている、すなわち、ボトムアップ式なプロセスで習得する。一方、日本語学習者は教室で明示的な指導を受け、練習を重ねていくためトップダウン式なプロセスで動詞形を処理していることを示唆している。

また、海外教室学習者の場合、初めはかたまりだった表現が徐々に分析され、さらに創造的な構造を構築していく (Myles et al.1999)、日本語学習者は特定

の動詞活用形をかたまりとして覚え、使用する（許1999、菅谷2003）などが報告されている。森山（2000：81）は、海外日本語学習者の動詞活用形の習得について、「読みます、書きます」のような具体的な活用形と「マス形の作り方」といった文法規則は相互に補完し合いながら習得されていくことを報告している。

目標言語環境で第二言語を学習する学習者の場合、周りから受けるインプットが多く、早い段階で上達するが、海外学習者の場合、インプットもアウトプットも少なく、さらに、文法を最初から規則中心に教わるため、それを実際のコミュニケーションに使用する場合、正しい規則だけを覚えてしまい、スムーズに話せない場合がある。つまり、教室で教わった知識は運用能力に至るのは目標言語環境で学習する場合に比べて遅いと考えられる。そこで、本調査では、教室で文法規則を明示的に教わっている海外学習者の場合、その知識を実際のコミュニケーションにはどのように活かしているのか、つまり、海外学習者の運用能力から文法（動詞形）の習得過程を分析することを目的とした。このように海外学習者の日本語習得過程を追及し、考察することで学習者側の習得のプロセスを把握することで、海外における文法教育について検討することができると考えられる。また、まだ第二言語習得研究がなされていないモンゴルの場合、動詞形習得の基礎研究になると思われる。

また、本学生海外調査を機に、今後モンゴルで第二言語習得研究を広げるために検討し、考察する必要があるモンゴル語の動詞形とその活用などについて書かれた研究論文や教科書を参考資料として調べ、入手した。

2. 本調査の研究経過と目的の達成

修士論文では、「モンゴル語を母語とする年少学習者の文法知識の形成過程」というテーマで対象者が来日した直後から収集した発話データをもとに分析し、考察を行った。その結果、母国で短期間ではあるが、ある程度明示的な規則指導を受けてきたにもかかわらず来日後それを活かし、さらに発達しているようなことは見られず、周りから受けるインプットをもとに、新たに文法知識を形成させていることがわかった。このことから、学習者が教室で受ける明示的な規則指導を実際のコミュニケーションにはどう活かしているのか、文法知識がどう形成されているのかを検討する必要があると思う。このように、文法知識の習得過程に

関する先行研究や修士論文から残された課題を探るため、本調査を行った。

本調査をモンゴル国立教育大学で日本語を専攻として学習している2年生から4年生、全18人を対象におこなった。モンゴルは新学期が9月に始まるため、調査実施時点では1年生は学習してまだ3ヶ月しか経っていないことから調査対象となる動詞形の産出が伺えられないと判断し、2年生以上の学習者を対象とした。

本調査は、学習者の日本語でのコミュニケーションから彼らの文法知識の習得過程を探ることが目的である。そのため、学習者同士でペアを組み、自由会話をするように指示し、発話を録音した。しかし、学習者によって話題も多く、よく話せるペアがいれば、話が進まず、止まってしまうペアもいた。そんなとき、トピックを与え、その中から好きなテーマを選んで話してもらった。

話の主な内容は、どの学年の学習者にもほとんど同じく、日常生活での話で、友達、家族、勉強、そして子ども時代や将来の夢、趣味、アルバイト、故郷などであった。会話の平均時間は、2年生は21.2分、3年生は23.1分、4年生は26.5分であり、学年が上がるにつれ発話数が多くなり、複文の使用も増加し、話の内容も豊富になることが観察された。特に、ほとんどの学習者の話から、調査対象となる動詞形を産出するとき、考えたり、言い直したり、繰り返して言ったりすることが伺えられた。トップダウン式の規則適用は処理に時間がかかることがWeinert（1995）によって報告されており、学習者のこのような産出は規則活用を考えているためかと予測される。そこで、動詞形をどのように処理しているかをさらに詳細に分析するために、会話が終わった段階で、「今、友達と話したとき、また、以前日本人と話したときのことを思い出して、頭の中で何を考えていたか」を伺い、録音した。これに関して、今後詳しい分析を行うつもりだが、学年が低い2年生では、6人中3人が「規則を考える」、2人が「話の内容を考える」、1人が「内容も規則も考える」と答えているが、3年生では、6人中3人が「規則を考える」、3人が「話の内容を考える」と答えている。一方4年生では、6人中3人は「内容を考える」が、3人は「まず母語で考えてそれを日本語に訳す」と答えた。このことから、学年が低いほど、つまり、言語能力が低いほど規則活用を重視するが、言語能力が上がる内容重視するようになると考えられる。また、4年生のほとんどが、日本語を習い始めた1、2

年生の頃は日本語で話すとき文法を間違わないように注意していたが、今は全く考えなくなったことを述べていた。

また、本調査に協力してくれた学習者から、互いに日本語でいろいろな話題で話したのは今回初めてであり、とても楽しかったことを言っていた。このことから、海外学習者は教室で学んだ知識を運用するチャンスが少ないことが見受けられる。

最後に、今回、本学生海外調査を得て、海外日本語学習者の発話データを収集したことは、今後博士論文を執筆にあたって重要な部分となる海外学習者の言語習得過程における中間言語を記述する基礎資料になるとともに、海外における日本語教育、日本学研究において基礎研究となる不可欠な調査となった。

3. 今後の研究計画、展望

今回行った調査を以下2つに分けて研究論文を執筆し、それぞれ学会誌に提出したいと思う。

1. 対象者全員の発話データをもとに、「海外日本語学習者の文法知識の習得過程—学習レベルによる違い—」という観点から分析し、モンゴル語を母語とする日本語学習者に見られる習得の特徴を記述し、考察した横断的研究。
2. 今回調査をおこなった大学2年生の中で4人のデータを今後も縦断的に収集し、同じ時期から日本語を学習し始めた、現在日本で留学している学習者の発話データと比較することで「言語環境による習得の違い」を検討する。

以上をもって、2007年度大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」支援を得ておこなった学生海外調査研究の報告書とする。

参考文献

- 許夏珮 (1997) 「中上級台湾人日本語学習者による『一テイル』の習得に関する横断的研究」『日本語教育』95, 37-48.
- 菅谷奈津恵 (2003) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断的研究：『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に」『日本語教育』119, 65-74.
- 森山新 (2000) 「日本語動詞習得の中間言語研究」『日本学報』44, 69-84. 韓国日本学会
- Klafehn, T. (2003) *Emergent properties of Japanese verbal inflection*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of Hawaii.
- Langacker Ronald W. (坪井栄治朗訳) (2000) 「動的使用依拠モデル」『認知言語学の発展』坂原茂編 61-143. ひつじ書房
- Myles, F. Mitchell, R. & Hooper, J. (1999) Interrogative chunks in French L2: A basis for creative construction? *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 49-80.
- Pinker, S. (1998) Words and rules, *Lingua*, 106, 219-242.
- Tomasello, M. (2000) First steps toward a usage-based theory of language acquisition. *Cognitive linguistics*, 11-1/2, 61-82.
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Vance, T. (1991) A new experimental study of Japanese verbal morphology, *Journal of Japanese Linguistics*, 13, 145-156.
- Weinert, R. (1995) The role of formulaic language in second language acquisition: A review, *Applied Linguistics*, 16, 180-205.

ないだん ばやるまー／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

本学生は修士論文において、日本で日本語を学習する年少学習者を対象に、文法習得（とりわけ動詞、形容詞の活用形）のプロセスを明らかにした。本海外調査研究はモンゴル日本語学習者の発話データを収集することで、彼らの動詞形の習得過程を把握し、モンゴル（外国語環境）で日本語を学ぶ場合と、日本（第二言語環境）で日本語を学ぶ場合との習得プロセスの違いや、何ゆえ修士論文の被験者が母国で日本語教育を受けてきたにも関わらず、それを日本での運用に生かすことができなかつたかなどを考察することができるようになる。

日本とモンゴルとの関係は近年各方面で急速に親密化しており、東アジアの韓国、中国・台湾に次いで、モンゴルにおける日本語教育はその必要性が日増しに高まっている。しかしながらモンゴル語を母語とする学習者の習得過程についての研究はまだ決して多いとは言えず、本学生の研究は今後モンゴルにおける日本語教育の発展に大きく寄与することが期待される。

(人間文化創成科学研究科 准教授 森山 新)